



「ねずみ小僧」のこと

「世に盗人の種はつきまじ」と喝砂したのは、石川五エ門であるが、その辞世の句のとおり泥棒が絶えたことはない。

幕末の江戸を騒がせた怪盗に「ねずみ小僧」がいる。寛政8年(1796)、江戸堺町の芝居小屋中村座の木戸番定七(一説では貞次郎ともいう)の長男として生れ、名は次郎吉、母はカヤ、弟と妹が1人ずつあり、母の妹も同居していたらしい。

次郎吉は早くから建具屋のもとに住みこみの小僧として出された。16歳の時生家に戻り、建具職として手間賃を稼ぐようになったというから、器用であったのだろう。

ところがその後、職人の腕がありながら、町火消「ろ」組の頭取の世話で鳶人足となっている。偶然にも次郎吉は幼少のときは建具師としての知識と器用さを身につけ、それに加えて鳶人足としての機敏さと、高所を恐れない度胸の訓練をうけたことになる。

生来の博奕好きの性格は、鳶人足となっても直るはずもなく、27歳の文政4年(1821)には勘当になってしまった。勘当となれば人別帳からは除かれ、無宿者となった次郎吉は悪の道へと深入りすることになる。

次郎吉が泥棒稼業に専心するようになるまでに2年を要した。以来3年間に、武家屋敷28ヵ所にのべ32回侵入し、金750両余を盗んだという。そのころの金一両といえ、米は1石以上買えたというから、今の米価に換算すると約3,800万円になる。

文政8年(1825)2月、土屋相模守彦直の屋敷で捕えられたが、町奉行所での取調べの際に博奕はしたが初めての出来心だと主張して、入墨のうえ中追放ですんだ。

出牢の翌春に、金毘羅詣りにでかけたが、これは四国の同地での博奕が目的だったらしい。

江戸に戻ってからは、住居を変えること10回、女房を変えること4回という。前者は泥棒稼業からきた用心のためであろうが、後者の理由はつまびらかではない。

天保3年(1832)5月、浜町の松平宮内少輔邸で捕われるまで、武家屋敷70ヵ所、盗んだ金額は2,300余両、一説には22,000両ともいう。四国から帰って以後の数でこれであるから、一生の間に武家屋敷から100回以上の盗みを働い

たことになる。金額では少なくとも3,000両以上におよぶ。当時の米価から換算すると、約1億数千万円以上、一説では約11億円にあたる。

同3年8月、丸顔で小ぶりのねずみ小僧次郎吉は、37歳で刑場の露と消えた。

英雄は創造されることが多い。幕末から明治にかけて、俠客物や白浪者を得意とする「泥棒伯円」こと、二世松林伯円という講談師がいた。ねずみ小僧の人気を造りあげていったのは、この講談師といってもよいだろう。それに刺激された狂言作者の河竹黙阿弥によって脚色されたのが、「鼠小紋東君新形」である。それが安政4年(1857)正月、時の名優小団次らによって江戸市村座に上演されると、100日あまりのロング・ランを続けるほどの大評判となった。ここに義賊としてのねずみ小僧の地位が確立したのである。

講談にはじまり、歌舞伎に上演されるにおよんで、ねずみ小僧の虚像は一段と真実味をまし、虚像と実像とが混合されるようになった。

ねずみ小僧の人気の原因は、1つに強きを挫き、弱きを助けるという俠気と、盗んだ金を貧乏人に恵むというヒューマニズム。(本所、深川辺に長く住んでいたから、附近の細民に多少の金子はめぐんだかもしれない。)

2つめには、武家屋敷ばかりを狙った痛快さ、誰もがやりたいと思っても、とうていできない武家への意趣返しをやってくれたという民衆の気持ちがあったからだろう。

最近、3億円事件が時効になったが、ねずみ小僧的ヒューマニズムは皆無としても、なぜ人気があるのか考えてみるのも面白いだろう。「武家」に相当するのは、何なのだろうか。

参考：現代思想4月号 (統計課 伊藤)





迷解植物辞典 (第2回)

【く ～ す】

くろもじ (黒文字) …… [原義] くすのき科の落葉かん木。山地に生じ、春、うす黄色の花を開く。木の皮に香気がある。漢方薬用。つまようじの材料である。

〔派生1〕 小話をひとつ。『店の方で声がする。「おい、親父。ようじ、ようじだ。」「へい、何かごようで。」「お前にようじじゃない。つまようじだ。」「はあ、うちの妻に何かごようで。」「ばかたれ。こようじだ。」「お客さん。うちに子供はおりません。』

※この小話がわからない人のために。

ようじ(楊枝)=つまようじ(爪楊枝)=こようじ(小楊枝)
要するに全部同じ「ようじ」のことである。

〔派生2〕 「黒文字」と一字違いの「湯文字」というのは、「湯巻、腰巻」のことで、昔の御婦人方はこれを腰にまいて入浴したという。足がもつれて大変だったろうと同情する。

けし (芥子) …… [原義] けし科の一年草。庭、畑に栽培され、5月頃、紅・紫・白色などの花を開く。未熟な実の乳液から「あへん」をとる。種は食用。または、からしなの種。

〔派生〕 「あへん(阿片)」という言葉は麻薬の代名詞となっている。最近では覚醒剤やシンナーが流行である。

シャーロック・ホームズはコカインの常習者という設定になっているが、そのまねをする訳にはいかない。しかし酒の常習者ということならば、もうなっている。

こめ (米) …… [原義] かほん科の一年草である稲の種。食用。水田や畑地に栽培し、わが国の最重要植物。

〔派生〕 酒の原料である。酒を気違い水とはよく言ったもので、泣く、笑うは序の口、物を投げ、店の中を走り回り、どんな所でも大の字になって眠れるほど人間の性格を変えてしまう。しかも一夜明ければ、それを覚えていないのである。

さくら (桜) …… [原義] いばら科の落葉きょう木。多く山中に生じ、春、うす紅色の花を開く。種類多く、わが国の国花とされる。木材は建築、家具用。

〔派生〕 「桜肉」というと、これは馬肉のことである。

「牡丹」というのはいのししの肉であるし、こんなことは、食通からみれば常識である。われわれが「煮こみ」といえば、豚のモツを連想するのと同じで、いずれにしてもよだれの出そうなことである。

シクラメン (cyclamen) …… [原義] さくらそう科の多年草。赤、白、紫等のきれいな花を開く。地下茎は豚の飼料。

〔派生〕 昨年暮には、「真綿色のシクラメン」を注文する人が多かったという。何のことはない、白いシクラメンのことなのだが、白いことを「真綿色」というところに、「シクラメンのかほり」という歌の影響を感じさせる。作詩・作曲の小椋佳という人、東大を出て、ある銀行のエリート行員であるとか。

ちなみに、「かほり」という言葉使いは誤りで「かをり」が正しい、東大出らしくないまちがいが、とこきおろした人がいたという。細かいことにこだわりすぎるのも考えものである。

シクラメンの和名は、カガリビバナ、またはブタマンジュウという。「真綿色のブタマンジュウ」では、買う気もおきない。

すいか (西瓜) …… [原義] うり科の一年生つる草。茎はつる性で巻きひげをもち、夏、うす黄色の花を開く。実は大形、球状で非常に水分に富む。食用。

〔派生〕 巨人軍の長島監督は、少年時代に他人の畑のすいかをとって食べたという。あの時代に育った農村の少年の多くが、そういういたずらをしたことだろう。

友人に巨人軍ざらいがいて、長島監督の現役時代にはテレビにその姿がでるたびに「すいか泥！」とどなっていた。

(統計課 伊藤)

